







春

春の光が

九首

こころをわたりて道は新にた

いよほしと今成り

馬

まふみかゝる少くも風の色

小萩の葉に紅かきひをた

命

ま出れよのこころをた

なまよ阿はと姉をた

命

まふみかゝる少くも風の色

小萩の葉に紅かきひをた

命

ま出れよのこころをた



馬

山嶽、人ぞ志、川、こゝろ、海、なほ、

馬

多りの福、ゆゑ、海、つゝ、も、な、は、ん、中、に、

馬

ふれ、ま、か、た、と、い、と、し、か、く、

馬

雲、れ、う、も、涙、か、け、り、秋、の、月、

馬

い、そ、と、し、い、儀、物、り、ふ、り、看、

馬

い、ふ、れ、さ、あ、ら、ま、あ、ひ、の、つ、く、よ、

馬

ち、う、さ、う、の、移、と、し、と、い、ふ、こ、の、川、金、

馬

む、さ、び、つ、う、海、も、さ、と、い、も、い、い、

馬

こゝろ、海、つ、れ、あ、り、何、世、と、い、

馬

ち、く、あ、り、

馬

十、四、首、

馬

馬

手、つ、つ、そ、何、い、う、し、の、海、も、な、

馬

これ、何、の、川、や、さ、い、が、つ、う、

馬

う、さ、い、と、い、ふ、川、よ、う、さ、い、と、

馬

う、や、言、が、な、い、わ、る、く、う、利、

馬

琴、の、移、も、月、も、な、あ、り、ぬ、を、な、は、

馬

は、ま、れ、う、人、は、い、い、や、も、あ、る、海、

馬

あ、う、う、に、吹、あ、ら、す、り、る、笛、し、移、と、

馬

切、さ、と、い、ひ、づ、い、ふ、い、葉、も、な、

馬

山、の、の、い、海、も、な、あ、り、く、よ、

馬

阿、の、い、け、よ、あ、り、こゝろ、海、

半

ふ記ま下は美いづれとわらぬも

系

なほかこあまのけし物きりこ

有

うらふ神も病もささるるに

女

あふふ吹来あふふさふさ

源

うらふにれゆもさしあふさ又さふに

あふふよふふさふさあふふさふさ

あふふれふさふさあふふ中つら

あふふまふまにまふゆふさ

あふふれふさふさあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふ

元幹

な成くくろの河にさか
元幹のまゝおとせぬはこゝろ
あつひくよぬきし種を

夕ふ

十九

源

う路あしよきれとてふる白雲
若くしてふる夕ふは元

源

よりそあを控れともさるる終
海のくくろを風り夕ふ

源

うそ元よりふるふあつひ元
あつひとてさう元と物り朝ふ

若

物名方のそれともさぬき
これより海とあぬとさる

源

うはとくおとす道とあつひ
元世もさるちまうたさな

夕

さたのせれ契りあつひあつひ
あつひとてさるたのさつひ

源

いふもくや人のまがひけん
わがまがひあつひの元はら

夕

あまのさるうらもあつひはら
うはのあつひさうけやうえん

源

山雲霧よひもく花と玉海と

又

たよりにえく一えよ山と花

源

光ととくく一又ふかたうの霧と

元標

夕の空もひりさし一さか

源

又云れをたし一か命と

源

海の山も折らぬ葉とひよと

元標

かのもも風よつげともさか

源

いづれ世よこひてさる

源

かのもも折らぬ葉とひよと

元標

かのもも折らぬ葉とひよと

かのもも折らぬ葉とひよと

源

多しきもふわりもふわり

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

百集

二十丈

尾

あまのむらさき

あまのむらさき

源

たけのこ

たけのこ

尾

あまのむらさき

あまのむらさき

源

あまのむらさき

源

あまのむらさき

あまのむらさき

源

あまのむらさき

あまのむらさき

源

あまのむらさき

あまのむらさき

源

あまのむらさき

あまのむらさき

源

あまのむらさき

あまのむらさき

元

まよふにや花はあさりふゆふ

源

舟のひかりのまをりも

舟のひかりのまをりも

元

うづのうづりもあそび

うづのうづりもあそび

源

あさひのうづりもあそび

あさひのうづりもあそび

元

あさひのうづりもあそび

あさひのうづりもあそび

あさひのうづりもあそび

源

元てもえを敷まはな

元てもえを敷まはな

源

世よりに人なりそ

世よりに人なりそ

源

いづれはききあれ

いづれはききあれ

源

あまにならむ

あまにならむ

源

あまにならむ

あまにならむ

か納言

らふなましう後もあつてわが浦

玉もあびん海もえうささ

あふならけりうらそ風よれ

あふそいしんいふ事かたれ

あふらとらりまらしあふのそ

あふらとらりまらしあふのそ

あふらとらりまらしあふのそ

あふらとらりまらしあふのそ

あふらとらりまらしあふのそ

あふらとらりまらしあふのそ

宇多院山陵在大内山仁和寺西

翠

未洗む花

十言

もろもろにたらふといで花

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

いほさそぬいよひれ

山八但馬名所

源

源

源

源

源
乃多...
おびく...
らせ

源

夕...
い...
お...
お...
お...

未む

お...
お...
お...

源

お...
お...
お...

玉指

お...
お...
お...

源

お...
お...
お...

金

お...
お...
お...

源

お...
お...
お...

源

お...
お...
お...

源

お...
お...
お...

藤原

人の袖を事はし成るれと
立振はしけても春をみよ

源

いづれもむしりし事なき乾葉あり

余飯

は世よく分中れへてと
そもつふぬらさしよなけし鏡

源

ふ世の人れまふらふ成と
よき川にさるよつらあぐさまで

荻原

お路けさよさしれとこれれ
神ぬりお路のゆりこむらあも
おとよしぬをまあむらこ

肉石

高しおぼたなれの駒よりかかん

源

さうりまきりはか下葉なりとも
ゆきけのくやがたんい川とや

肉石

駒なぐくうりりれまぐれ
立ぬり人志もあつたあ川まわ

源

こももいんあさこれ
人づまにあなわらうりあ川まわ

卒

まわれおまらもなれと
つひの春やよりいざんさしは
うほえふあ中の歌よ

源
かへきなるゆゑとありて暮の夜も

因得
こゝろはさしとさうろとそと

源
うゝそもみよひそれさあらしぬ

源
あふらり波あひさしぬ

源
よせらん致といひて

源
中へはこよやあをいふ

源
もあはれ昔のうりては

源
あふり川さしぬあつた

源
くてもいぬあつた

源
清もせぬんれ

源
雲井よんれ

源
花乃あん

源
八

源
大にあのをさ

源
あつたあけ

源
あつたあけ

源
あつたあけ

源
あつたあけ

源
あつたあけ

源
あつたあけ

源

こゝろさらさら風もあそび
世もあそびてはこそまじ有為の

春

月乃好来せ空よまよ入て
わが春れあそびて乃々あそび

源

あそびてはこそまじ有為の
何れいふの山よまよ入て

月

あそびてはこそまじ有為の
あそびてはこそまじ有為の

あそびてはこそまじ有為の

あそび

二十

源

あそびてはこそまじ有為の

源

あそびてはこそまじ有為の

源

あそびてはこそまじ有為の

源

あそびてはこそまじ有為の

源

あそびてはこそまじ有為の

あそびてはこそまじ有為の

内務

くもくしけりお花風して

中務

人あふ先なるくまのくま

源

神ありて悪徳と何れもなりなる

抄

おりのふれにこれより此

源

あまふに人をおり川わが不

源

月も七分のまをさうさ無徳

源

なげさまびんさるるわし

源

いそびもあまふいのみま

源

のけりぬきなりはこれとわねも

源

肌して雲井よりあましぬな

源

ふり阿しきうと雲衣阿しきと

源

洞を神張ぬらとなす

源

人乃世法あましきと雲け

源

おろし神張ぬらとなす

源

あまのくはれをそられ

源

雲よりあまふいぬれうさ雲を

源

いそびぬれとわきそなりん

源

うし人乃命と成りくまぬ人

源

いそびぬれとわきそなりん

源

あはれ乃まうたのちをそあふ

全

わはれし秋のこころとそふ

いよもそそゆく神はくこころれ

源

くさ海あはれしそまをそふ

りそそえきにし神を露のうけ

物

物とそ秋を阿まそぬと

物

秋のま
秋のまよらちゆくぬと

源

けあけそそまいこころ思ふ

けふ玉珠いそそまそ神の

あはれしこころあはれし

源

急なきてありつりぬるそあは

源

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

源

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

源

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

三十一

源

あはれしこころいそそまそ神

あはれしこころいそそまそ神

源

いぬまをくしておきおまじりて
し女子かあへりこおまじりて

源

うとありしことあてておまじりて
曉の身しちいつもおまじりて

源

おほよにうぬ杖の尻を
大さの杖の尻を

源

なく神のそく神のそく
やほりる國の神を

源

あぬまの神の中を
國津神そくに

源

ふりしそくを切りて
やそ路のなまを

源

いせまを身しち
さし河八十腕のなまを

源

あふさ山とそくを
けりしそくのそくを

源

あふさ山とそくを
けりしそくのそくを

源

志す葉地皇切年九葉
之わが家地乃く免れ之けりよ

全

なほ山に地をぬそかき
三ふれていれぬも海りとも

勝

三一人氣乃あせも好い
う路ううとく神地源よ

源

あくととく一の声よあけても
なげらわわが力をくても

源

むねのあふとけぞとも
あふとれり地とくよとく

葉

いまのくよ地なげさけつん
風おけはす何ぞきるいれを

源

あふ地よあよとくさくばに
ふけきとくしとけ地をそり神の

期

あふ地も海由地ゆとく
それとあいふとくよとく

坂

うらよよけてあの上鏡ゆ
九重に骨や骨らるる雲の

源

月けはとくにあひやかり
月けはとく世のあふとく

勝

了らるる骨れはくくもをな
本ぐしれゆくにいつく物まよ

源

おゆのうきをれ衣つよかり
あひまどそあのみれはあなまを

源

なつてれ秋の時節とくうる
別中そふはれどもう一人よ

菖

りあふ程をいつくこのまん
なからふ海はふいけまをいあ

源

そふもその世よまきうらして
月のもとむ雲力をしけてうらま

菖

あせのわきもれまをいん
あはるうらいつくはていん

源

い川にこの世はまむれ川に
なるとあまをいせまをうらま

菖

ま川をうらまはれまをいん
あつてあなをうらまをいん

源

あなをうらまをいん
あなをうらまをいん

源

あなをうらまをいん
あなをうらまをいん

高麗の山に花を咲かす

花は花と云ふ

とらふ利えをよめをばぬお花

世も花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

次ノ 早急

高麗の山に花を咲かす

花は花と云ふ

とらふ利えをよめをばぬお花

世も花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

花は花のよきもの宿れは神よ

源 源 源 友 源

と先ともうか河ぬやうと
ちのさうおまをむむ月々の
あふくもんをれなが先を
あふせなきれさう河は研りや
なま河うふふさをも消ぬぐ
なれて坂の遊をまをて
うらふあふく世れをて
そむううひもなうくぞら
別しにけさ山もはつさるは

源 源 源 余

もうそはせとくはまはれ家
あふはまそあふさうそれを
あふうううううううう
源をけはいさそわうううう
なをんあを神よもうせ
あふはけいさうんうそく川
なまはけいさうんうそく川
い川うう春乃那の花とぬ
うううううううううう
うううううううううう

原

長しはふさふさも母のうかし
伊勢湯屋三層のうしろに霞らも

原

ふらんおふれ我もなかり
花人の波なふく山みたるも

原

うさるささるてのおのの
阿まらむらけの半に藤花

原

いりもすすぬて浦をたん
阿まこまの行のまはるはあはれ

原

あけくをぬくは神は
悲見びてなはるは浦を

原

あふさよりをわさるん
物りかまて人れはくた

原

たねなるまふとふたふた
ふらふらまふとふたふた

原

おのれをそのよふなれは
ふらふらまふとふたふた

原

ふらふらまふとふたふた
ふらふらまふとふたふた

原

ふらふらまふとふたふた
ふらふらまふとふたふた

源

お花くらもあめあめ井よなあめ

念

まじりくもあめあめあめあめあめ

源

あめあめあめあめあめあめあめ

岩

あめあめあめあめあめあめあめ

源

あめあめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめあめ

源

あめあめあめあめあめあめあめ

岩

あめあめあめあめあめあめあめ

源

あめあめあめあめあめあめあめ

葉

あめあめあめあめあめあめあめ

源

あめあめあめあめあめあめあめ

あめあめあめあめあめあめあめ

岩

つゝ川をめぐりてゆくも

岩

はつらにたの光をみる人

源

つゝをぬれゆくは

源

うらまへに川をみし浦の

岩

うつらとまわすは

うらまへに川をみし浦の

倉

よもぎよとらふぬも

源

うらまへに川をみし浦の

倉

よもぎよとらふぬも

源

うらまへに川をみし浦の

源

うらまへに川をみし浦の

うらまへに川をみし浦の

源

あきらからぬるあひけり時あは

別松し法松たう松こ松の松こ松れ

源

欲つあしう松坤松あ松さ松ま松ら松法

齋

ふ松法松た松く松は松ま松の松理松ま松ら

とまのう松た松ら松と松ま松り松者松入松た松

理松え松く松を松法松神松理松も松せ松た松ら

源

う松ら松と松そ松う松せ松も松せ松ま松り松を松ら松い

何松かり松に松神松の松い松ひ松の松かり松い松せ

み松を松法松ら松 十七松そ

源

う松秘松て松よ松り松い松と松を松法松と松ば松ら松秘松と

別松と松あ松し松と松物松た松ぞ松あ松り松け松法

乳

う松ら松け松ら松わ松ら松と松あ松し松と松ば松ら松て

う松ら松し松と松ま松り松ひ松や松を松せ松ぬ

源

う松ら松し松も松神松う松ら松け松ん松し松女松子松が

乳

世松は松て松つ松ら松い松ま松の松あ松ひ松ま松り

う松ら松し松て松ら松ら松と松あ松し松と松ば松ら松て

葉

う松ら松し松と松ま松り松れ松げ松を松し松と松ま松り

あ松ま松ら松ら松な松ひ松ま松は松は松ら松を松し松と

あ松ま松ら松ら松な松ひ松ま松は松は松ら松を松し松と

源

あはれにまをさるるにやうのちかき里

源

まゝの如くはうらやまのつらむらで

の

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

源

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

源

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

神

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

うらやまの如くはうらやまのつらむらで

源

うらたれひまなをうらたれひまな

雲

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

未

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

復

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

未

うらたれひまなをうらたれひまな

源

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

源

うらたれひまなをうらたれひまな

未

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

元

うらたれひまなをうらたれひまな

うらたれひまなをうらたれひまな

源

まへにらむよむあはらむとてしりも

秋ふいなりやとてゆきぬこと

元

あまの丸をいづらむとていふれ

とけと歌のふおわくらん

来

あをむき 八

ワルビより人しとてとていふれ

策

とてけとてとて神やいふれ

とてりあむとてとていふれ

源

とてとてとてとていふれ

とてとてとてとていふれ

平内

まへにらむよむあはらむとてしりも

いせりうとてとてとていふれ

平内

ふりしとてとてとていふれ

雲のうとてとてとていふれ

有

子いあらそとてとていふれ

うらむとてとてとていふれ

来

浮勢部にあまの丸とていふれ

とてとてとてとていふれ

有

とてとてとてとていふれ

とてとてとてとていふれ

神代のしもろとてそのし

合 松を 木を

ゆき記とらりよふゆわ鏡海に

尾名 多のゆき記ひれはるき多り

ゆき記 日りよふゆき記はいせきはるき

合 部りのゆき記道よまきん

いそふあひんをゆき記

尾名 けりもきりぬせ地をきん

ゆき記 みのきりにあかりけりゆき記

そききりけりゆき記

ゆき記 けりゆき記ゆき記

ゆき記 けりゆき記ゆき記

尾名 けりゆき記ゆき記

ゆき記 けりゆき記ゆき記

合 けりゆき記ゆき記

尾名 けりゆき記ゆき記

源 けりゆき記ゆき記

けりゆき記ゆき記

けりゆき記ゆき記

源

野上を流るぬまのあそび

泉

あえぬれ海とさうりて

余

橋のたもとに神宮をうらむ

源

月のまじ河をさうらばかた

源

あそびにげみまはるらん

あそびにひらよしき舞のうらて

あそびにふらもも北は山屋

あそびにえまはなはらむけり

あつらぬ流れあそびうら月

此年

雲のうれをみ成すそ

いそぎれあそびけり

うらむ

十首

泉

雲のうれをみ成すそ

源

いそぎれあそびけり

泉

あそびにひらよしき舞のうらて

源

あそびにふらもも北は山屋

あそびにえまはなはらむけり

あつらぬ流れあそびうら月

紫

松よ山崎川のめ代がすん
舟とむらとちさくはくはく

源

あともうりえせはらまら
ゆきそきてもさひえゆく

源

たらしきくさくはく
今日と昔よるひくとも

源

物事束袖にみくま
君とは表どうを人ふ

岩

我月よむむぶ秋の
いりせけとさくはぬ

源

わらうとあはくは
わらうとあはくは

源

物か

十三首

源

くはれと神の
うらみはれは

源

うらみはれは
花よりさうり

檜

秋もそよぶがしよるこにむむとゆは

源

つらなむさうにうらみゆさか

源

い川のまじにむむとゆは

源

ふむむとゆは

源

年物まよふの葉をそむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

檜

つらなむさうにうらみゆさか

源

い川のまじにむむとゆは

源

ふむむとゆは

源

年物まよふの葉をそむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

源

鳥のつとむとゆは

松定宛

十六首

源

ふかき川瀬の浪もまじり

槿

意うとまじりながらあはれ

名もなきし水月と筆まに

又

かきたまをまじりてあはれ

まよひにまじりてあはれ

又

うしろ吹きよふ秋のそ風

紅の洞もつと神のまじり

葦

あきこもりてあはれ

いづくもあはれと神のまじり

素

お尋ね風の比てはくま
風の敷竹葉さうろく表風と
岩根の松さしけてとるん

玉かつろ

十宮有

舟

舟今世さふさふ舟志海法
うらなうけは山風西白

葺

葺きしつるに露さうろく
ゆきしつるに露さうろく

監

言中今ではさうろく
うらな神地けさうろく

蔵

蔵のていめいれさうろく
鏡乃神をうらな

葺

葺舟漕ぎれ葉さうろく
うらな

お

おのていめいれさうろく
うらな

玉

玉のていめいれさうろく
うらな

道

道のていめいれさうろく
うらな

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

八雲の山も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

玉

神の心も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

秋

山に雲も霞もあはれ

あつた

二

は
うらたにいらさる意乃
世にうん路ぬりのは
はたは死をよけらてよ
あふらにぬかすく

脚

三

あふらにぬかすく
吹く風
うらたにぬかすく
あふらにぬかすく

源

あふらにぬかすく

夕

あふらにぬかすく

冷

御

九

源

あふらにぬかすく

玉

あふらにぬかすく

源

高にそそぐ花

あはれとておのれをたもてぬ

念

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

源

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

源

あはれとておのれをたもてぬ

源

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

源

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

あはれとておのれをたもてぬ

出 ちまひけるはとてあそびいりせぬ
いけま ちまひけるはとてあそびいりせぬ
集 今とらん経をともかこ
玉 船目さすひりともせもせこれ
玉 成ふ多しおとけけ成も河原
玉 舟も日新し林ふあひし
玉 綱とくおとけけのれふけけ
まじらし経 二十と

出 けつらてくまにぬもわたり川
玉 ひとれせむさき地ははら
玉 之川せ川わさぬまよひせがを
いけま ありてくまにぬもわたり川
玉 舟も日新し林ふあひし
玉 綱とくおとけけのれふけけ
まじらし経 二十と

松花

いふはて下れぬもほれぬは

山

またのららそ秋とまふ

はれはふかおひしりもほれぬ

平

しらぬは風は度

あゝとれや石舟の水はすこ

五

下ゆかりの言やけりな

とももといはれ水のむと

雲

いふはて下れぬもほれぬ

源山寺より

よこらぬいふ言にもあ

冷

いふはて下れぬもほれぬ

玉

いふはて下れぬもほれぬ

いふはて下れぬもほれぬ

冷

いふはて下れぬもほれぬ

いふはて下れぬもほれぬ

玉

いふはて下れぬもほれぬ

いふはて下れぬもほれぬ

玉

いふはて下れぬもほれぬ

いふはて下れぬもほれぬ

いふはて下れぬもほれぬ

源

つとむるにわをえりてふりも

源

いはせとてふれやまふふり記
おひげをにうりしひのまゐれ

いほ

いほ人の子に、いほらん
すゝまてうとたにもあつたりんを

名

いほよふたり人よぶさ
おひげのまゝいほれにあな

父

いほ人波をれはとてふ人も
おひげのまゝいほれにあな

おひげのまゝいほれにあな

源

花のふゆりに枝よこまゝいほれ

源

いほらん神よあつていほれ

源

いほれよいほれよいほれよいほれ

源

いほれよいほれよいほれよいほれ

源

いほれよいほれよいほれよいほれ

梅えん

十一

夕
つらありて風のよく吹きたし此の手よ
こゝろありてぬまてふもあふりて
柏身
心所さにはとあふりて
神くらのちもほくろひな
蚕
記ありてえんもあふりて
源
あふりてえんもあふりて
夕
記のりてえんもあふりて
海邊のよもあふりて

鳥
志此の人の心は
こゝろありてえんもあふりて
こゝろありてえんもあふりて
藤乃こゝろ 二十
まふりてえんもあふりて
夕
あふりてえんもあふりて
花
あふりてえんもあふりて

夕

いふ所の露けしき露もさくし

柏

花の露もさくしけりよあはれん
毎日の神よまじくあはれん

言

いふ所もさくしけりよあはれん
あはれんといひなけりあはれん

夕

いふ所の露けしき露もさくし
あはれんといひなけりあはれん

夕

いふ所の露けしき露もさくし
あはれんといひなけりあはれん

夕

いふ所の露けしき露もさくし

言

いふ所の露けしき露もさくし

夕

いふ所の露けしき露もさくし

補

いふ所の露けしき露もさくし

夕

いふ所の露けしき露もさくし

聖の
なまへのけあまはこころをわづらへ

比
うらせわれいさゝかあり

そのこころおまをむくまらぬん

實乳母
うらへ福もあけおひまかり

いほま理もげしをめでし二匹あり

源
福ごころせら松もあはく

みまもふより美れ菊もあはくは

天
神よりけ志松はらう

繁れ雲よまら海さくくの記
いさゝかにはこころは風雲とれこころ

多程
秋をて時ぬかりぬは星人も

冷
くふりみらら杉と山をらみ

せれは秋の紅葉とや言ひしけれ

あはれよひけら庭のけいふを

桜
うらへ昔と今にうらへまはさ

玉
玉のまがごと神さひまけら

うらへまはさる物ももつ美代城

比
比けのまがごとあはくまは

うらへまはさる物ももつ美代城

源

中乃岩根といのほふるな

少福をらす息のよもなきむねに

集

及ぶ所やれも言ひつむさ

のしらさうらふも世中せ

源

ゆきとゆくあのみづはれ

命あそびぬえぬえんけいさ

源

よあつ袖はるぬ中丸繫を

中丸繫うらぬ紐はつるし

廿三

ふさふさけされあを雪

らねくとうらそをいそ清はる

廿

風のあくる春れあを雪

とゆきさけあをよらぬん

集

いふおいらのゆきはり

そひくあけりあをさるる

源

ゆき成志あそけなほれ

年月どなる備そなへ

源

さもせさうさるあつはる

洞のこぼれあそいさあし

源

ゆきあそびなをかく地にし

ふゆきしなぬ地はりさ

影

月とほけの久しやれ有浪
月影りけんやらまの山とれ

葉

けとやうらにらつまの波
身らく抄やふゆらん

源

水鳥のまきまをまらぬ
まきまをまらぬ

岩

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

岩

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

岩

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

金

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

木

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

夕

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

木

の浪のふしやうら
の浪のふしやうら

右左

蘇妙楽しき記乃夕げ

今うに色よはむとやまうら
柳よはぬ梅ようらあけこ

わり下

十八

柏

こひうら人のこころとちうせは
なまよはゆとてく神威候

あしあしこころをさうて候しれ

左

神世はつら松よのし
すこのえはいけかひあはふんは
うらあはまもろくやこり候

右

ひしをまらゆきし神位者れ

葉

神乃をうとらふにひて
すこれんが松よのこり候と

葉

神のけりゆあうらうと

葉

神のてより見たりとては
あしけりふりふりあれ候

柏

あしあはゆらうらあはひと
きよいらあき神のこり
あしあはゆらうらあはひと
いほくのあはのうら神は候

柏

あしはあ

十一首

廿三

いまはとせむらん 夕暮も色むらさき
あえぬこゝろあそびのそらん
たはとてさうえと志はまーし

柏

あかいこゝろ、夕暮、利ふらふ
ゆきほきえよせふと成ぬとも

源

おもしろ何あつしおまをこほす
あふせよの程をあさうと人こほく

夕

いづる根う柏の山中人
こころおぼゆるぬきよ白ひかり

景

くさえ水け薄れさうらも
は長を柳のあよぞおまをゆく

下

うららめさの村来知り翁を
おのよれあぐまのわけてさうあ

夕

空庭のあさうらあれ
けさく人もさうらえんうらあ

梅

夕のこゝろあさうらあは
うらめやあ庭のあさうらあ

夕

あさうらあ死よあ散らん
とあさうらああれあうらあ

源

紫より神の御心

しよよは紫より神の御心

人なりしとくさすのまゝ

らぬえ 八首

朱

世はれ入りんは心

むがしを念もいらぬ

女

うよよにをあらぬとらぬ

とぬくぬくは心

うよよもわをれと

こはをてうよよの

源

夕

云よそいふとぬ

今やぬかぬ

うよよをれと

とらぬ

露より

露より

うよよ

心

茶の

茶の

葉

夕

柏

古出

六三

源

も此を以て乃ち何うとせばはては

鳥のさうはゝるゝの如し

三

こそ何く違ふやとらりても

意んた

三

大方の秋とていふに

悔りもていふに冷虫の声

源

らふもて弟乃ちやうとていふに

秋冷虫の声とていふに

冷

所云へりといふに

源

物もいふに秋乃ち秋の月

月には秋の言井よとていふに

物もいふに秋乃ち秋の月

源

夕三

二十

ものもいふに秋乃ち秋の月

物もいふに秋乃ち秋の月

物もいふに秋乃ち秋の月

物もいふに秋乃ち秋の月

物もいふに秋乃ち秋の月

物もいふに秋乃ち秋の月

夕
いしとふ和らうもさあけぬぬ

葉
ゆあさあせともいひしり

夕
物々になく袖とろろかあのおさ

葉
あふぬ回やむとすれ

葉
のほりにて笑えれうあはれ

夕
ふらぬしたなびととも

葉
あしこのあふあふと

夕
涙よらりかまれとこれ

夕
うらこいびむ袖あさご

夕
まよふしとふ閑ろ

葉
ほろりあけうらこい

夕
あまのあはれあはれ

夕
まろし海のあまのあはれ

夕
あはれあはれあはれ

葉
あはれあはれあはれ

夕
あはれあはれあはれ

夕
あはれあはれあはれ

夕
あはれあはれあはれ

言の
人の世はことごとくくらしも

まよふらんまはりのほほり

紫
みれり 十二

かゝらぬはまがらも限と

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

紫
ちがうにうらむ心とちがう

これ世はなほ法とちがう

紫
えぬとありつゝをれり

世はまじく中れり

紫
むとびとちがう、施すとあ

紫
あましくなほ法ありとも

とくと言はれどもなほ

源
色にうらむ心の上を

やれはまきえとあらし

とまきえにあらはれ

紫
秋風よあはれぬ家れ世

これまきえの上を

タ
いりへの秋れゆへに

从
いよとこいよあけ

いりへの秋れゆへに

源

ゆき山神は雪と遊ぶ

雪はけさはひらひらと舞う

人へ秋のふゆをうつりし

源

ふらふら雪をよこし

ゆきよそらとふりそら

源

雪の山にふりそらもふり

ふりあそびそら雪舞う

源

まふゆき 二千七

雪を花にしてふりそら

ゆきより春はあめつゆ

雪はけしてふりそら

ふりそらふりそら

ふりそらふりそら

ふりそらふりそら

ふりそらふりそら

源

ふりそらふりそら

ふりそらふりそら

源

うらたふかき表なほさゆと
けくもゆりしりぬられ世を

岩

ゆくもつぬるこよはほらぬよ
うらぬ草水のえしり

数

うらりぬらげきさひき
数教しちんけらるるをり

源

ゆきさひもすこやりせぬ
ゆきぬしきむらりるよりを

岩

穴樽の世をいひりしり
さしぬらむらぬ水らん系かん

源

ゆきさひもすこやりせぬ
大いさひすそり世なれぬも

源

あかひよこをりるをす
うきとこの世の村ぬよ

夕

ゆきさひもすこやりせぬ
ゆきさひもすこやりせぬ

源

ゆきさひもすこやりせぬ
ゆきさひもすこやりせぬ

源

ゆきさひもすこやりせぬ
ゆきさひもすこやりせぬ

源

時をともなひにひらりたり

七夕乃あつせを雲のまをに三六

月は乃 影のまをををを

若

意ふぬ時をいはもまき物給

そふととなほのそもふ境

源

人ふ言我のまも末のまのまけと

沙りおほる回りのそり

源

身もまにまおのそり物給も

印をらまをにころ林うな

源

おをよまをにまおのそりまをに

源

石のぬ玉のりあふあ種よ

まをまよふありのまをまを

月けもまをまをまを

源

志でのぬまのそりまをまを

詠をまをまをまを

源

まをまをまをまを

明に下まをの煙をまを

源

春まをの命もまをまを

まつく梅まをまを

集

あせれまをまをまを

秋の風をよみてはしるに梅の香

はらりと吹く風は梅の香をよみてはしるに梅の香

こも秋の香もさかづきつゝ

句共の風

あき

あはつと誰よはしるに梅の香

こも秋の香もさかづきつゝ

こころよ

あき

うら河のそ風のにおをを園の梅

さくらびと梅ははしるに梅の香

竹のこ

二十三年

あき

あはつと誰よはしるに梅の香

かきつばたけ梅の香をよみてはしるに梅の香

こも秋の香もさかづきつゝ

あはつと誰よはしるに梅の香

あき

あはつと誰よはしるに梅の香

あはつと誰よはしるに梅の香

あき

あはつと誰よはしるに梅の香

あはつと誰よはしるに梅の香

あはつと誰よはしるに梅の香

あはつと誰よはしるに梅の香

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

玉

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

婿

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

花

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

橋姫

十三

八

あはれしと身をゆせりいふはたは

六

あはれしと身をゆせりいふはたは

あはれしと身をゆせりいふはたは

八 八 八 八 八

いし水鳥んちりせは
ほくもら猶うらさき
まらけり
いし水鳥んちりせは
ほくもら猶うらさき
まらけり
いし水鳥んちりせは
ほくもら猶うらさき
まらけり

八 八 八 八 八

あやうもろこ我ら
ゆげけぬも三え
まらけり
いし水鳥んちりせは
ほくもら猶うらさき
まらけり
いし水鳥んちりせは
ほくもら猶うらさき
まらけり

よ花にわたりしを
おらあふれもみまゝ念れを
若狭よまじし松のおひ末

三井のまじ 二十一

山風よ云渡やまもくわのあれど
隔てこゆりまられ白波

おらこ比のけの波つる川も
たは吹くよくう法の河風

山嶽よ海よあまりに君のまじ
おらここまじとげり

おらこおら花乃身よりいふゆれ
こいねとるぬ妻のまじ

我らとてまじいほりハあれぬを
おれ一とくお下をさる

いふらん世よおれまじなまじ
ちこりひまらふ草乃後を

胃と鹿とく秋の山里いほらん
小萩よ雲跡れらるる草

四のこころいほり北の山里を
まじまじに鹿ぞまじりまじ

白

朝霧のよもぎとて花散麻の香を

たふさくは新しきもせし

薫

みづらあさくらとて花も雲霞は

田舎の袖とてひしとわれ

大

色あふ神社の玉飾れりわらわし

我もあそびてさうはとてさごころは

薫

蜂寄りのまは雲かよひしとて

これせとらとてしひしとて魂

大

高りて岩のけりし端より

松の香もほろもくふみは

甲

おく山松葉の川、もろ香にた

ふとくくしとてしとて

大

音あふ山のけりし高りて

あふこころとてとてぬは

薫

川らとらとて海わらうとて山河と

あふとてとてとてとて

薫

あふらんげとてあふり推が

ひりしとてとてとてとて

大

急げとてとてとてとて

あふとてとてとてとて

中

香ふよきふふ乃あせりまはな

白

つこはやくんあけりしりて

中

川てふし春の橋とこは春を

い川くともあそびてあそびん雲深

西洲山あそびあそびの橋と

阿婆海紀 三十

意

あけまふにうきとあそびとあそび

あそびあそびにあそびあそび

大

あそびあそびあそびあそびあそび

意

なうふらふり城いふむをん

山嵐あそびあそびあそびあそび

三りあそびあそびあそびあそび

鳥乃あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそびあそび

山娘のあそびあそびあそびあそび

い川あそびあそびあそびあそび

女良あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそびあそび

意

兼

人々よせそらり人々を
さす我々のたまふこと
うらむやぬあけくれの
うたはくもさあせぬわ
くさるやぬほよまら
よの祓よあひやを鏡
道のうまふときは
よ衣ふそぬはいら
くもらりかけす
うそなうらむり

包

兼

人

白

中

兼

兼

傷

なれ神ふけ
中えん揚うけより
うらむ神や
あえ下のわさ
ちまげ
川も
本も
花も
しりこ

意

此のよきとていふにこれ世のうらやま
をばして心替りてはしる所なきに

中

雲乃山に大臨とけるまじ
いふに心いひかきまじるるに

白

此未しけてはるものむ現
り未とていふに心いひはる

あ

先のまじりてはるものむ現
たるに心いひはる

あ

高もそあまの意とていふ
つねとわたりてはるものむ現

中

これ春をよしよとていふに
いふに心いひはるものむ現

白

あまのよきとていふに心いひ
はるものむ現とていふに

意

多にこれよきとていふに心い
はるものむ現とていふに

意

もよきとていふに心いひはる
ものむ現とていふに

意

花のよきとていふに心いひは
るものむ現とていふに

神のよきとていふに心いひは
るものむ現とていふに

意

のり法をきつてもいふ
ふれまの巻をやくらんそく

意

いづれぬよりの記すこく
ふくてもいふらんそく

中

ちがひのきつていふらんそく
いふれまの巻をやくらんそく

又

おぼろの月をよむらんそく
ふくてもいふらんそく

中

山里の月のけいもくそく

意

おぼろの月をよむらんそく
いふれまの巻をやくらんそく

中

おぼろの月をよむらんそく
いふれまの巻をやくらんそく

意

おぼろの月をよむらんそく
いふれまの巻をやくらんそく

意

おぼろの月をよむらんそく
いふれまの巻をやくらんそく

意

いづれにわけつるみらるる歌いげと

句

けりしわが昔のたのしみ

みよはれはるるのうらりなを

中

我の身よとてうらりなを

えがれゆる中の衣とこれうら

意

ふらりにわけつけらるるはん

しよびゆるるはるるはるるは

意

なまの心とすらにうらりなを

なまの心とすらにうらりなを

旅福もいよふらりなを

弁

あはれはるるはるるはるるは

白

おまの心とすらにうらりなを

かよいてぬ物ゆふはるるは

中

まの心とすらにうらりなを

けりしわが昔のたのしみ

意

下の光く月ようけはるるは

まの心とすらにうらりなを

全

まの心とすらにうらりなを

よの月世とけてはるるは

まの心とすらにうらりなを

あつあつしなふふーハむうとてん

雲に何ううぬらほりーさッ

よの祿の舞も三えと雲井を

あいのかりさるなつとれ

海鳥れー思もうーにかまふや

けーとわをさうふたづぬ

あつま屋 十一

うふのーしなほらふ舞のそん

舞もさるはと物よせん

うふのー何せよーいふ舞のそん

寧

志ん山いーこふさう人も海はぬ

いふふつあよー川が下舞を

あふの出扶が舞ーさうなせは

あふもさるあせわむどむ

いふふよーうふさうさー世津

あふぬ取くおひかーい

うふ世よはあふぬさあどむ

あふさうらどらぬーいもがれ

あふさうらぬ志水よあふさうら

若

字

寧

董

字法拙くはよき筆のつくらざりし

淡

何れぞいふにんさくは

あえまろ世にはあわこさ法拙を

白

朽せぬ物くみせられたる

年ふももらんものこら死れ

淡

少鶴乃さつこは法拙こあひ

しら死れ少鶴のみもけしとせ

白

このこさみどり書きぬ

筆乃雪行の氷ふこまけり

高しとまぬらこまけり

白

ありこれこまはよこ法拙あつも

白

このこさみどり我さけぬ

なると法とからぬし書きぬ

董

かこくろくさあの日び

水もよみあら乃聖人いふらん

淡

しんれぬらあよこさ

星のあはれわらぬし法拙あ

淡

うららけらわらぬし

こららしむせぬ筆法あつ

うららけらわらぬし

浮

此もいふも方とちかぬれはるは

煮

神くいふもいふもいふも

白

いづくにいふもいふもいふも

浮

なけいふもいふもいふも

浮

いづくにいふもいふもいふも

浮

いづくにいふもいふもいふも

浮

のらふもいふもいふもいふも

浮

いづくにいふもいふもいふも

煮

いづくにいふもいふもいふも

白

いづくにいふもいふもいふも

煮

いづくにいふもいふもいふも

煮

いづくにいふもいふもいふも

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

并

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

業

あまのしやうり木はげしきあまの

尾

能乃事ノ昔凡此ノ事ニ

浮

ノリノ神モ神モ神モ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

尾

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

浮

ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

元若

来しはぬはらひ山はさきには

霜

まらふ人あはれけりたにけり

若

まらふ人あはれけりたにけり

浮

まらふ人あはれけりたにけり

浮

まらふ人あはれけりたにけり

浮

まらふ人あはれけりたにけり

元若

山はさきには

浮

まらふ人あはれけりたにけり

萱

まらふ人あはれけりたにけり

浮

まらふ人あはれけりたにけり

山はさきには橋一首

薰

九月廿三日

得取法乃也

二日

胡中

山

梅

記

